

プルースト 夢の戦略

今川, 泰隆

<https://doi.org/10.15017/10024>

出版情報 : Stella. 19, pp.55-66, 2000-09-05. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン :
権利関係 :

ブルースト —— 夢の戦略

今 川 泰 隆

『失われた時を求めて』は、眠りの実況中継で幕開けし、夢にまつわる記述がそこかしこに散りばめられた作品である。必然的に多くの研究者たちがブルーストの夢に関心を寄せた。精神医学の見地からマルセルの「眠り」を厳密に再現したドミニク・マバンのような際立った例をのぞけば¹⁾、観察の傾向は2つに大別できそうだ。美学的な考察と精神分析からのアプローチである。エリザベス・ジャクソンが試みた夢の美学的位置づけは後にアン・アンリやリュック・フレスによる再検討をうながすことになるだろう。精神分析批評はフロイトの理論を援用し、作品中に描かれた夢のエピソードに無意識の顕れを読みとった。ときに草稿研究は夢の叙述にさえ注目したが、テキストの変遷過程や作家の足跡をたどることがあくまでも主眼であった。たしかに夢はさまざまな文脈で俎上に載せられてきた。しかしながら本格的な研究はまだまだ立ち遅れているのが現状だ。無意志的記憶^{レミニッツァンズ}という文学装置のおかげで、背景へ押しやられてきた感はやはり否めまい。いったい小説家にとって夢とはどんなものであったろう。じつは「夢」にこそ芸術創造の奥義が潜んでいたのではないだろうか。その可能性をさぐるのが本稿の最大の狙いである。

1

無意志的記憶について言えば、いく人かの詩人から重大な影響を受けことを作家自身が告白している²⁾。では夢の場合はどうだろう。興味の発生源を特定するのは容易ではあるまい。遺伝的な要因や心身の発育過程にくわえ読書遍歴、さらには時代の知的風土までも射程に収めなくてはならないからだ。処女作『楽しみと日々』からすでに、あるいは『ジャン・サントゥイユ』にも関心の跡はうかがえよう。しかし、ここではむしろひとつの事件に注目したい。プ

ルーストを夢の探究へ駆り立てたと思われる契機。1905年9月26日、母ジャンヌの死である。この喪が息子にもたらした最大の苦痛がほかならぬ夢であった。目覚めているあいだは意志の力で押し殺しているもろもろの感情が、眠ったとたんに悪夢となって噴出したのだ。母の死後、友人へ宛てた手紙に悲痛な訴えは数多い——「眠りは目覚めた知性ほど苦悩を加減してはくれない」³⁾ せいで、マルセルは「もっとも残酷な印象からさえ身を護るすべがない」⁴⁾ のだった。

なるほど夢の舞台では〈圧縮〉や〈置換〉といった独特の操作によってゆがんだ現実が姿をあらわす。快楽は検閲され、苦痛が緩和されることもあろう。しかし同時に、拭いさりたい過去の印象が否応なくよみがえることもまた事実である。だからこそ、ときに眠るひとはどんなにつらい現実からも逃れられないのだ。たとえば心療内科では、夢の分析は患者の無意識を探る常套手段だ。治療の突破口として夢は活用される。が、不幸にもプルーストにとっては夢そのものが苦痛の種となった。となれば夢と対峙するよりほかあるまい。この姿勢はのちに作品のなかで、画家エルスチールの助言として語られるだろう——

夢にかりたてられる精神は、夢から遠ざけたり、夢を制限したりしてはいけません。あなたがご自分の精神を夢から引き離そうとするかぎり、精神は夢を知ることができません。そしてあなたは夢の本性を理解できないために、数えきれないその外観にもてあそばれるでしょう。もしいくらかの夢を持つことが危険なら、その状態から立ち直るためには夢を少なくするのではなく多くすること、夢全体を自分のものにすることです。もはや夢に苦しまなくなるためには、自分の夢をすっかり知り尽くすことが大切なのです。[II, 199]

母の死後、悪夢に苛まれたマルセルにとって、もはや「夢の外観」に翻弄されないために、探究が責務となったと推測するのはあながちの外れではあるまい。折しもラスキンの翻訳を手がけていたプルーストは、精神医学や哲学、心理学などさまざまなジャンルの文献に接していた。なかでもアルフレッド・モーリヤエルヴェイ・ド・サン＝ドニの夢にかんする著作は作家に多くの示唆を与えたであろう⁵⁾。

ところで、肉親を亡くした悲しみが、後悔や自責の念とあいまって悪夢へと姿を変えするという実体験が、のちに作品に吸収されたことは周知の事実である

う。『ソドムとゴモラ』の「心の間歇」では、祖母の死から1年以上も経ったあと、無意志的記憶によって主人公は、はじめて祖母の不在を痛切に実感し、さらに夢での体験が喪失感を増幅させる。過ぎ去った真の印象が2通りの記憶によって見出されたのだ。プルーストにとって芸術の素材となる唯一のものが、過去の印象だった。さまざまな仕方では彼は過去の印象を取り戻そうと努めるだろう。

たとえば、無意志的記憶の一例である「ユディメニエルの木々」の場面はあきらかに失敗であったろう。あれこれ推測してみるものの、結局沸き上がりつつある幻影の正体を解明できなかったのだ。これは契機がもっとも知性的な視覚刺激、つまり映像であったためだ。きっかけからすでに意識が勝りすぎているために、過去の真実からは遠ざかってしまうというわけだ。同様のことが夢想についても言えよう。この場合、発端の最たるものが土地の名であったが、固有名詞が喚起するイメージはつまるところ偽りのものでしかなかった。というのも、「私の想像力が憧れたもの、私の感覚が現在という時間のなかで不完全に知覚したにすぎないものを名前という隠れ家に閉じこめていた」[I, 380]にすぎなかったからだ。さらに回想についていうなら、プルースト自身、過去を語るさい意識の動きがいかに無力かを痛感していた——「回想によって選びだされるイメージは、想像力が作り上げて現実によって破壊されるイメージと同じくらいに恣意的で、偏狭でとらえがたいもの」[III, 149]であり、「回想は忘却のおかげで、それ自身と現在の瞬間とのあいだになんの関係も結ぶことも、どんな鎖の輪を投げることもできなかった」[IV, 449]のである。

過去を発掘するにあたって、発端はつねに偶然でなければならない。ひとまず意志の力は排除されねばならなかった。無意志的記憶といえど過去の真実をとり逃がすことはある。夢想や回想はいうにおよばずであろう。一方「眠っている人間は自分のまわりに、時間の糸、歳月とさまざまな世界の秩序をぐるりと巻つけている」[I, 5]。同時に意志や理性が排除されているため、ときに夢は遠い過去との奇蹟的な邂逅を演出してくれる。「コンプレー」冒頭、眠りをめぐる考察のさなか、プルーストは唐突に次の一文を挿入している——

私たちをとりまいている事物の不動性は、ひょっとすると、その事物がそれであって他のものでないという信念、つまりそれらを前にしたときの私たちの思考の不動性に

よって、押しつけられているものかもしれない。[I, 6]

裏をかえして、睡眠者はいっさいの「押しつけられ」たものから解放される、といわんばかりではないか。プルーストにとって、忘却のかなたに追いやられ意識の力でたぐりよせることのできない過去ほど、真実を伝えるものだった。ときにそれは甘美な悦びであったろう、あるときは消し去りたいほどの耐え難い苦痛でもあったろう。覚醒中はアクセス不能な過去でさえ、けっして失われてはいない、その事実を証明してくれたのは、なにも無意志的記憶だけではなかったのだ。

2

精神分析批評にとって夢は「テキストの無意識」を引き出す格好の材料であった。ミルトン・ミラーは、フロイトとプルーストとの驚くべき類似性を示し、ベルマン＝ノエルは「スワンの夢」に無意識の活動を読みとった⁶⁾。しかし夢にたいするプルースト自身の姿勢は、精神分析的な「解釈」とはあきらかに一線を画すものであったろう。なぜなら小説家の関心は、夢の表象よりむしろ現象の方へ向けられたからだ。たとえば「ネルヴァル論」のなかに、眠りゆく精神状態への興味が如実にあらわれた箇所がある。プルーストは、ネルヴァルに「きざしはじめたばかり狂気」を芸術家に特有の気質、「現実よりも夢や回想に重きを置く傾向」であると見なし、この傾向がついに狂気にいたった場合を次のように語る――

狂気こそが文学的独創性の発展そのものになるため、彼〔ネルヴァル〕はそれを可能な限り描き出してゆく。ある芸術家が眠りに入りながら、覚醒から睡眠へと移っていく意識の諸段階を、眠りこむことで両者の分割がもはや不可能になる瞬間までずっと書きとめていくように。⁷⁾

『失われた時を求めて』は、眠りの描写で幕開けする。とすれば、プルーストの場合、眠りこそが「文学的独創性の発展」そのものとなったのではないだろうか。晩年、あるアンケート回答のなかでプルーストは自らの小説美学を論じたさい、分析小説にとって大切なことは「知性の光が射すだけで壊れてしまう

ような現実を、できるかぎり衰弱させないように努めながら、無意識のそとへひきだして、知性の領域へ入れる」ことであると述べ、その作業がいかに困難であるかを説くのにやはり眠りのたとえを援用している――

それはちょうど眠りながら、しかも知性の介入が目覚めをもたらさないように、知性をもって自分の眠りを検討しようとするひとに必要な慎重で従順でかつ大胆な努力と同じたぐいのものです。用心が必要とされるあまり一見矛盾をはらんでいるように見えますが、この作業はけっして不可能ではありません。⁸⁾

10年以上も隔てた2つの証言から、睡眠への関心が一貫していたことがうかがえよう。芸術理論が極みに達するとき、眠りのたとえを用いたのはおそらく偶然ではなかったはずだ。単に作家が、創作と睡眠のあいだに共通点を見出したからではない。眠りを検討すること、夢見る精神が描きだす世界を知性の力で捉えることが自らに課した使命だったのだ。「けっして不可能ではない」と断言したのは、ほかならぬプルースト自身が実践した証拠ではあるまいか。

『失われた時を求めて』冒頭、語り手は眠りに引き込まれながらも、自らの精神状態を極限まで観察しつづける――

私はまだ手にしていたつもりの本をおき、明りを吹き消そうとする。眠りながらも、たったいま読んでいたことについて考えつづけていたのだ。ただし、その考えは少々特殊なものになりかわっている。自分自身が、本に出てきたもの、つまり教会や、四重演奏や、フランソワ1世とカルル5世の抗争であるかのような気がしてしまうのだ。こうした気持ちは目がさめてからも数秒のあいだつづいている。それは私の理性に反するものではないけれども、まるでうろこのように目の上にかぶさり、蠟燭がもう消えているということも忘れさせてしまう。ついではそれはわけの分からないものになりはじめる。転生のあとでは前世で考えたことがわからなくなるように。[1, 3]

このくだりをめぐって、ドゥブロフスキーは鋭い洞察力でみごとな解釈を披露した⁹⁾。ここでは「フランソワ1世とカルル5世の抗争」に彼がくださった裁定にのみ注視したい。ドゥブロフスキーによれば、歴史的抗争が意味するものは「夢見る私」と「解釈する私」、2つの審級に引き裂かれた「私」の象徴的なたとえであるという。覚醒から夢に移行するためには、根源的な断絶を、すなわち「転生」を経なくてはならないからだ。たしかに夢を解釈することと夢を見

ることは本来的に相容れない。「夢を解釈すること、それは私がおもは夢見るものでなくなったときにしか可能でない。夢見ること、それは私が解釈者たりうることをやめたときにしか可能でない」¹⁰⁾からだ。しかし、夢を見ながら解釈することがまったく不可能だとも言えまい。語り手の「眠りながらも考えつづける」行為じたいが、ある特殊な夢の形態だったのだ。プルーストにとって目覚めながらに夢を見ることは大きな誘惑であったにちがいない。その動機はさまざまな読書体験からも裏付けられよう。たとえばマルセルの愛読書であった『千夜一夜物語』には「目覚めた睡眠者」が登場する。あるいはプルーストが芸術作品の模範と見定めた『シルヴィ』にも、意識の覚醒をともなう夢が描かれていた。さらにエルヴェイ・ド・サン＝ドニが提唱した「明晰夢」の概念が作家に夢見の実験をうながしただろう。その結果、プルーストは強靱な精神力で、同時通訳が可能な夢にまでたどり着いたのだ。意識と無意識が互いを打ち消すことなく、しかも最大値をとる究極の場に。「フランソワ1世とカルル5世の抗争」は、引き裂かれた「私」の比喩などではけっしてなく、覚醒と睡眠のはざままで、本能と知性、感覚と言語が奇蹟的に共存しうる世界の暗示だったのではないだろうか。

じっさいプルーストは覚醒と睡眠のあいだに明確な境界線を設けていなかった。すでに『楽しみと日々』に収められた習作のなかで「僕は徐々に目覚めていった。というより、夢の世界で少しづつ目覚めていった」¹¹⁾と素描していた。『失われた時を求めて』になると、移行の様子はいっそう精密に描写される――

目覚めが私たちにひき起こす変化は、意識のはっきりした生活に私たちを導き入れることよりも、それまで知性が身を休めていた場所、乳白色の水底のようにいくらか光のさざぎられた世界の思い出を失わせることにある。私たちはその一瞬前まで、まだなかばヴェールのかかった思考の上にただよっていた。その思考は、私たちがそれを覚醒状態と完全に呼べるようなひとつの動きを私たちの内部にひき起こしていたのである。ところがそのとき目覚めがやってきて、それにさざぎられて記憶は中断する。そしてまもなく私たちはもうさっきの思考を思い出せなくなるので、それを今度は眠りと呼ぶのである。[II, 631]

睡眠中に現われる夢もやはり、覚醒時の生と断絶したものではなかった。プ

ルーストが次のように述べる時、人間の生に占める夢の位置が明らかになるだろう——

私がこうした夢を語るのは、人間たちの生を、それが沈み込んでいる眠りのなかに浸さなければ、かれらの生を描き切ることができないからであって、眠りは、小さな半島が海に囲まれているように、夜ごと夜ごと人間たちの生を取り囲むのである。[II, 384]

作品を構築するにあたって、夢は不可欠な要素だった。じじつ夢の場面は作品のなかで、つねに重要な転回点をもになっている。保莉瑞穂の評言をかりれば、「夢を人間の心的現象の重要な領域」と見なしたブルーストは「その世界をできるかぎり忠実に再現し、そこから覚醒時の生とはことなる夢の特性を取り出す」ことに努めた。とりわけ夢は「真の印象」を蘇らせる場だったのである¹²⁾。そこでわれわれは以下の2点、「夢言語」と「夢の速度」に注目したい。

そもそも夢には前言語的な独特のことばが存在する。その夢言語とでもいうべきものの顕著な例は、「心の間歇」で主人公が見た夢のなかに登場する——

「でも、ぼくがお祖母さんのそばでいつまでも暮らしていくことは、お父さんもよくご存じでしょう、鹿，鹿，フランシス・ジャム，フォーク」。しかし、すでに私は闇に包まれて蛇行する川をふたたびわたって、生者の世界が開ける地表にまた登っていた。だから私が「フランシス・ジャム，鹿，鹿」と繰り返しても、こうした言葉のつながりは、ほんの少し前までその言葉があれほど自然に私に表わしていた明晰な意味と論理をもはや示してはくれず、私はその意味も論理ももう思い出すことができなかった。さっき父がいったアイアスという言葉がなぜ、一点の疑いも無く、「直ちに寒くないように気をつけなさい」ということを意味したのか、もう私には判らなかった。[III, 159]

語り手が目覚めるきっかけとなった「鹿，鹿，フランシス・ジャム，フォーク」。この難解な呪文については何人もの研究者たちが関心を寄せ、なかには象徴主義的な解釈を試みた例もあるが、われわれにとって重要なことは、「言葉の象徴性よりも、言葉がただちに意味に結び付くその直接性」¹³⁾にはかならない。ジュネットがいうように、「覚醒時の意識にはそうした夢言語が理解できないということ」¹⁴⁾を証明する例だったのである。このことは「夢は右脳の

働きによるもの」だという脳生理学の観点からも明らかで、夢と言語とはやはり本来的に両立しえない。ことばの介入はすなわち左脳の優勢を示し、目覚めへの移行を意味するからだ。しかし注目すべき点は、語り手が「アイアス＝〈直ちに寒くないように気をつけなさい〉」という関係性を目覚めた後も覚えていたということである。たとえ因果関係が把握できなくとも、知性が対応関係をすくいとったことはまぎれもない事実である。「フランシス・ジャム、鹿、鹿」とつぶやいても虚しかった。けれども「アイアス」というシーニュに隠されていた思想だけは同時通訳に成功したのだ。これこそは目覚めながら夢を見る可能性に挑んだプルーストならではの夢解読の実例だったとは言えないだろうか。

では夢の速度についてはどうだろう。「コンブレー」の冒頭に興味深い記述がみられる――

たとえば夕食後に肘掛け椅子に腰掛けてうとうとするようなときは、世界が軌道はずれて完全な転倒がおこり、この魔法の肘掛け椅子のおかげで時間と空間をたいへんなスピードで飛びまわることになる、そしてまぶたをあけるときのになると、数ヵ月前に別な国で寝たような気がするだろう。[I, 6]

さらに『見出された時』では、同様のことがらをいっそう直接的な口調で表現している――「眠っている人にとって、こうした眠りのなかで流れる時間は、目ざめている人間の生活が実現される時間とはおよそ異なっている。その流れはときにははるかに素早く、15分が一日にも思える」[III, 370]。

睡眠者は現実的なあらゆる観念から解きはなたれる。むろん、時間や空間にたいする感覚も麻痺してしまうだろう。とはいえ、このような猛スピードの夢がはたして可能なのだろうか。特殊な能力をもった人間は、驚くべき速さで夢見を遂行することがあるといわれるが、プルーストもそのような能力をもっていたのだろうか。たしかに彼は、しばしば夢のなかで「はるかかなたの巨大な距離に追いやられていたいくつかの遠い時間が、一夜のうちに、一夜の一瞬のうちに、全速力でわれわれの上に襲いかかってくる」のを目のあたりにした。とはいえひとたび目覚めると――

もうそれらの時間は、奇跡的にとびこえてきた距離をふたたびたどってしまっていて

われわれに次のように信じ込ませる、といっても間違っただけで信じ込ませるのだ、それらの時間は失われた時を見出すモードのひとつであったと。[IV, 491]

この記述からただちに、夢は「失われた時」を見出す錯覚をもたらすだけだ、などと決めつけるのは早急すぎるといわねばなるまい。「目覚めた睡眠者」となったプルーストは、いわば錯覚を錯覚でなくしてしまうだろう。そのとき夢は無意志的記憶と同様に芸術家を「超時間の領域」[IV, 450]へ導くことにはなはずだ。

3

プルーストは『見出された時』終盤で、夢は「つねに私がもっとも強くこころを打たれた事実のひとつ」であり、「現実がもたらす精神的な性格をもつものであると私に確信させ」る手助けをしてくれたと述懐した。その直後、小説美学における夢の位置づけが端的に示される――

私は考えた、夢の諸事実は、私だけが努力しても、また自然に到来する出会いを待たせてさえも、私に提示されなかった真実や印象を、ときどき私に近づけてくれるだろう、[...] このことこそ、創作するための、習慣から脱するための、具体的なものから離れるための条件である、と。私はこの第二の詩的靈感 (muse) を軽んじはしまい、ときには第一のものの代わりをつとめるこの夜のミュージズを。[IV, 493]

「第二のミュージズ」とはいうまでもなく「夢」を指している。第一のミュージズが無意志的記憶を暗示していることも容易に察しがつくだろう。注目すべきは、夢はときに無意志的記憶と同等の効果をもたらすものだとして作家が認めていることだ。自己をとりまくあらゆる現実から脱却し、知性を排除し、自らを創造的な自我へとを導くための第二の手段、それがほかならぬ夢だった。たしかにプルーストにとって無意志的記憶こそが至上のものであったろう。ドゥルーズの慧眼は「プルーストが特権的瞬間を生産すること、これらが文学機械の効果になること」が何より作家の独自性であったことを見抜いた¹⁵⁾。しかしである。小説家自身は「芸術作品を無意志的記憶だけで構成するには、その存在があまりにも稀少」[IV, 477] だったと述懐している。とすれば、もはや夢とい

う「夜のミューズ」の力を頼るほかなかりう。芸術創造を志すブルーストの関心がしだいに夢へ移行したとしても必然のなりゆきではなかったか。死期を自覚し、描くために蟄居生活に身を投じた小説家にとって、夢は無意志的記憶とほとんど同義になったのである。

ところで、ネルヴァルの『シルヴィ』を評して「知性がまさっていた」¹⁶⁾とブルーストがもらした真意はいったいどこにあったのだろう。傑作と絶賛しつつ、一方で「ジェラルムよりもっと遠く」を目指す決意をノートにも表わしている。推測の域をでないが、ブルーストは小説造形にあたって、ネルヴァルとは別の、まったく前例のない手法をあえて選択したのだろう。たとえば『オーレリア』は夢の実録を作品に転化したものだったが、ブルーストは夢そのものを作品の素材としたわけでは断じてない。眠りの精緻な観察のすえ、〈夢〉意識とでも呼ぶべきあらたな知覚を獲得し、文学創造に適用したのである。この適用を示唆するかのような、じつに興味ぶかい証言がある。ブルーストは1922年3月、友人に宛てた手紙のなかで自作品の独自性について次のように語っている――

私の本のなかに見てほしいのは、この本全体がある特別な知覚の適用から生まれたこと（少なくとも私はそう思っています）なのです。そしてその知覚は、それを実践したことのないひとびとに対して描いて見せるのが非常に難しいものなのです（ちょうど盲人に視覚を説明するのが困難なように）。¹⁷⁾

さらにブルーストは「時に向けた望遠鏡」のたとえを用いて「特別な知覚」の説明をつづける。望遠鏡が、肉眼では見えない星たちをみせてくれるように、彼はその知覚を発揮し、「完全に忘れ去られてしまって、時として非常に遠い過去に位置している無意識の現象を意識のなかに出現させようと努めた」¹⁸⁾のだと証言している。「時に向けた望遠鏡」は、目覚めの瞬間に「夢のさまざまな光景を持ちさってしまう流れ星」[II, 631]を捕えるだろう。「特別な知覚」こそは、夢の同時通訳を可能にしたのだ。夢という第二の特権的瞬間に立ちあらわれる無数の象形文字を慎重に解読し、知性のちからで再構築することこそが、小説家の最大の野望だったのではあるまいか。「全思考、全心情、さらに全生命」¹⁹⁾まで注ぎこんでもまだ足りないほど、作業は過酷なものだったにちがいない。

結 語

ブルーストにとって「文学作品のすべての素材は過ぎ去った生」[IV, 478]であった。知性の力では喚起することのできないその素材を、無意志的記憶とひとしく、夢が現実に取り寄せてくれた。意思や理性の干渉がない眠りの世界では、純粋な過去に再び出会うことができるのだ。さらに眠りの観察を極限まで押し進めたブルーストは、覚醒と睡眠のあいだに、意識と無意識が絶妙のバランスを保つ奇蹟の瞬間を見出す。眠りを自在にあやつり、同時通訳が可能な夢を出現させることに芸術家は心血をそそぐだろう。このとき夢こそが文学的独創性の発展そのものとなった。目覚めながら夢を見、そこに描かれた世界を知性の力でことばに翻訳する、この戦略的な夢見から作品はうまれたのだ。自らの死を悟った芸術家が、意識と無意識のはざままで透視した生涯の記録、それこそが『失われた時を求めて』だったのである。

註

- 1) Dominique MABIN, *Le sommeil de Marcel Proust*, Paris: PUF, 1992.
- 2) Marcel PROUST, *À la recherche du temps perdu*. Édition publiée sous la direction de Jean-Yves TADIÉ. Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 4 vol., 1987-1989, t. IV, p. 498. ブルーストの告白とは以下のようなものである——「それ（無意志的記憶から引き起こされる感覚とそれに続く美的印象）は私における個人的な特徴で、もっぱら私に限り重要であったにしても、その特徴は、ほかの何人かの作家たちにおける、そう目立ちはないが識別しうる、ようするにかなりよく似た、特徴に結び付いている」。さらにつづけて、『墓の彼方の回想』『シルヴィ』『悪の華』を具体例として挙げている。以下、この作品からの引用の場合、引用末尾の [] 内に巻数およびページ数を記す。訳出にあたっては筑摩書房版『ブルースト全集』および、鈴木道彦訳（『失われた時を求めて』、集英社、1996年より刊行中）の両方を参照した。
- 3) *Correspondance de Marcel Proust*. Texte établi, présenté et annoté par Philip KOLB. Paris: Plon, 21 vol., 1970-1993, t. V, p. 348.
- 4) *Ibid.*, p. 373.
- 5) Alfred MAURY, *Le Sommeil et les Rêves*, Paris: Didier, 1881; Hervey de SAINT-DENYS, *Les Rêves et les Moyens de les diriger*, Paris: Amyot, 1867.

- これら夢学の書物がプルーストに及ぼした影響については以下に詳しい——Anne HENRY, *Marcel Proust. Théories pour une esthétique*, Paris : Klincksieck, 1981, pp. 336-344.
- 6) Millton L. MILLER, *Psychanalyse de Proust*, Paris: Fayard, 1977; Jean BELLEMIN-NOËL, *Vers l'inconscient du texte*, Paris: PUF, 1979.
 - 7) Marcel PROUST, *Contre Sainte-Beuve*, précédé de *Pastiches et mélanges* et suivi de *Essais et articles*. Édition établie par Pierre CLARAC avec la collaboration d'Yves SANDRE. Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1971, p. 234. 『サント＝ブーヴに反論する』のテキストとしてはプレイアド版を使用した。
 - 8) *Correspondance*, op. cit., t. XX, pp. 496-497. 批評家で小説家のアンドレ・ラングが「政治・文学会報」第78号（1922年2月26日）に載せるアンケートのためにプルーストに文書で以下の質問をした——「1. 文学流派はまだ存在しているか。2. 分析小説と冒険小説のあいだに区別をたてるとき、なにか重要なことを意味すると思うか、またそれは何か」。
 - 9) Serge DOUBROVSKY, *La place de la madeleine*, Paris: Mercure de France, 1974, pp. 178-183.
 - 10) *Ibid.*, p. 182.
 - 11) Marcel PROUST, *Jean Santeuil*, précédé de *Les plaisirs et les jours*. Édition établie par Pierre CLARAC avec la collaboration d'Yves SANDRE. Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1971, p. 128.
 - 12) 保莉瑞穂『プルースト・夢の方法』, 筑摩書房, 1997年, 58頁および75-80頁。
 - 13) 同上, 73頁。
 - 14) Gérard GENETTE, *Figures III*, Paris: Éd. du Seuil, 1972, p. 199.
 - 15) Gilles DELEUZE, *Proust et les signes*, [8^e éd.], Paris: PUF, 1993, pp. 183-184.
 - 16) *Contre Sainte-Beuve*, p. 240.
 - 17) *Correspondance*, op. cit., t. XXI, p. 77.
 - 18) *Idem.*
 - 19) *Correspondance*, op. cit., t. XII, p. 298.